
猫をも殺す好奇心

津名友香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫をも殺す好奇心

【Nコード】

N4691Q

【作者名】

津名友香

【あらすじ】

近親相姦したい。と常時思っている雅彦の家は地元の名士である。数十年に一度しか行われないう「十代の儀式」 肝心なところで口をつぐむ兄、従兄弟で婚約者の恵里子は何かに怯えている。独自の世界観を展開する遠縁の親戚、本家の人は一体何の宗教に入っているのだろうか？

一章 温かい飲み物

「旨いのか？ それ」

「……」

雅彦の問いに、答える声はなかった。

食事中の人間に質問をして、すぐに返答が来ないというのはよくあることかもしれない。

しかし、雅彦の話しかけた相手はもう既に食事を終えていた。にも関わらず返事をしないということは、自分が何かやましいことをしているという自覚があるからなのだろうか？

「猫なんて食べるもんじゃないだろ。それともアレか、新潟では猫を生で食べるのか？」

そつだ。雅彦の話しかけている相手は数分前から野良猫を食べていた。

地面には内臓をさらけ出した三毛猫が横たわっている。

相手はゆっくりと立ち上がると、大きく首を左に捻った。掛けている眼鏡には、所々赤いものが付いている。

「……ああ、雅彦さんですか。見えませんでした。僕のこと、覚えていらつしゃったんですね」

相手の名前は斎藤貞一。新潟県に住んでいる、雅彦の遠縁の親戚に当たる男だ。雅彦が「新潟では」という言葉を使ったのも、それを知ったことからだった。

(見えなかったって、こんなに近くに居たのに……？)

雅彦が首を捻り、考えを巡らせていると、貞一はその様子に気付いた。慣れた口調で言葉を続ける。

「すみません、左側からだ、良く見えなくて……」

その言葉を聞き、雅彦は古い記憶を呼び起こした。

たしか、貞一は片方の目の視力がかなり悪いと聞いたことがあったかもしれない。

自分では十分貞一の視界に入っているつもりだったが、実際は違
ったということか。

「恵里子さんに用事ですか？」

雅彦が黙っていると、貞一が尋ねた。

恵里子というのは雅彦の従兄弟にあたる人物だ。本家の長女でも
ある。

「な、何で？」

雅彦は貞一の口から出た「恵里子」の単語に動揺した。

「だって、婚約してるんでしょ？」

そうだ。本家の長男である恵里子の兄が東京で就職してからとい
うもの、本家の人間は恵里子と雅彦を結婚させたがっている。

「本家の人は皆言ってますよ。恵里子さんもまんざらでもなさそう
でしたし」

（本当かよ……マズいな）

雅彦は貞一の言葉に顔をしかめた。

恵里子とはそんな風に考えたことがないのに……。

「いや、今は通りかかっただけで……見りゃ分かるだろ。学校帰り
だよ」

雅彦はそう言いながら自分の服の襟を掴んだ。紺色のブレザー。

「へえ、まだ冬休みじゃないんですか？」

貞一は興味のなさそうな声で返事をしながら、欠伸をした。大き
く開けた口からは見たくないものが顔を覗かせていた。

（手で隠すとかなんとかしろよ。まったく……）

雅彦は貞一の代わりに、自分の視界を手で覆った。

なんて品のない奴なのだろう？

「あれ、雅彦さん？」

背後から声を掛けられた雅彦は、貞一のほうを見ないようにして
振り向いた。

なんだか嫌な予感がする。

「え、恵里子。中学はもう学校休みだろ？」

噂をすれば、というヤツだろうか？ 背後にはセーラー服姿の恵里子が立っていた。長い髪を二つに縛り、鞆を両手で持っている。

「……補修だったの」

照れ笑いをしながら答える恵里子に、雅彦はどう反応を返したら良いか分からなかった。

今日は急いで帰らなければならぬのに……。

(そういえば、貞一君は？)

辺りを見渡すと、貞一は悠長に自分の眼鏡を拭いていた。神経質なくらいに丁寧に。

これでは品があるんだか、ないんだか分かったものではない。

雅彦が困った顔をしていると、貞一は満足そうな表情を浮かべながら眼鏡をかけた。ゆっくりと雅彦たちのほうへと足を進める。

「では雅彦さん、僕はこれで……必勝法は、上上上下下左右左右ですよ」

気を聞かせたつもりなのか、貞一は理解不能な言葉を述べると、どこかへ行ってしまった。

(ふざけんなよ、あのクソガキ)

雅彦は恵里子に気が付かれないように、小さく舌打ちをした。あの上上下下とかいうのは何だったんだらう？

「雅彦さん？ どうかしたの？」

恵里子が首を傾げながら雅彦の顔を覗き込んでいた。長いマフラーが重力で垂れ下がっている。

彼女が貞一の食べ散らかした猫の死体に気が付いていないのは、不幸中の幸いとも言っただらうか？

「いや、何でもないよ」

雅彦は自然と恵里子と帰ることになった成り行きに、小さくため息を吐いた。

一刻も早く家に帰るため、恵里子と共に歩き出す。

(まあ、一緒に帰るくらいならいいか……)

横目で恵里子を盗み見ると、小さな声で何やらボソボソと話をしていた。

「ん、何？ 良く聞こえないんだけど」

雅彦の台詞に、恵里子は驚いたように目を大きく見開いた。そして、しばらく時間を置くと、幾分大きな音量で話し始める。

「だから、ドストエフスキーよ。名前に『ヴ』が付くのつていいわよね。フォードロヴィチ、とか」

恵里子の言葉に、雅彦は首を捻った。良く分からないが、「バカ！」より「ヴァカ！」のほうが迫力があるという話だろう。

「ん、ああ。そうだな」

その場を取り繕うための相槌。

いつからだったろうか？ 恵里子とこんなに距離を感じるようになったのは……。以前はもっと、自然に会話をし、遊んでいたはずだったのに。

気が付くと、明るかった空は暗くなり始めていた。冬の天気なんてこんなものなのだろうか？

「雅彦さん」

「何？」

恵里子の声に雅彦は反射的に答えた。それまでの中途半端な相槌を取り繕うかのように。

「明日、よね。桜子ちゃんの退院」

桜子というのは雅彦の妹だ。七つも離れているため、喧嘩もしたことがない。彼女は心臓が悪く、もう二年も前から入退院を繰り返している。

雅彦は、恵里子の口から桜子の名前が出たことに少し驚いた。桜子とはもう、一年以上も会っていないはずなのに。

「そうだよ。兄さんから聞いたの？」

「ええ、まあ。とても喜んでいたわ」

雅彦には十五も歳の離れた兄がいる。明朗快活な人物で、恵里子の家が経営している会社で営業の仕事をしているのだ。恵里子に話

をしたとしてもおかしくはない。

「そう。まあ、俺はどうせ明日終業式あるし、兄貴が迎えに行くだろうな」

雅彦はそう言葉を返しながら、兄である弘康に嫉妬を覚えた。本当は、終業式なんてサボって一刻も早く桜子に逢いたいのだ。

そんな風に会話をしていたら、もう恵里子の家の近くまで辿り着いていた。

外からは立派な生垣に囲われていて、本館は全く見えない。唯一、今は使われていない立派な蔵だけが僅かに顔を覗かせているだけだ。(いつ見ても不気味な家だよな)

雅彦は戦国時代から存在しているという生垣を眺めながらそう思った。自分の祖父母の家だというのに、この家の雰囲気には慣れることができなかった。

どんよりとした、人を不安にさせる何かが渦巻いているとしか考えられない。

「じゃあ、俺はこれで……」

あまり長くはここに留まっていたくない。

それは、別に恵里子のこと嫌いだとかそんな理由ではなかった。しかし、当の恵里子はそうは思わなかったようで、立ち去ろうとする雅彦の袖口を掴む。簡単に振り払うことの出来る、僅かな力。

「……え、恵里子。俺、今日は急いでるんだよ」

恵里子の手を振り払えない理由はたくさんあった。それこそ数えきれないくらい。

あとで本家へ顔を出し辛くなる。近所付き合いも悪くなるだろう。親戚というのも考えものだ。

雅彦は東京で就職したという恵里子の兄の気持ちがあったような気がした。

「……怖い」

恵里子の言葉に雅彦は眉間に皺を寄せた。たしかにもう辺りはすっかり暗くなり、この家も不気味ではあるが、恵里子の言葉はそれ

とは別の事柄を指しているような気がしたからだ。

「蔵から声を聞いたのよ」

雅彦は、出そうになつたため息を必死で堪えた。

恵里子は真剣に悩んでいるわけだし、何よりこんな所で泣かれてもしたら大変だ。

しかし使われていない蔵から声がする、なんて信じられない。聞き間違いか、風の音か何かをそう思い込んだ、というのが真相なのだろう。

「大丈夫だよ。気にすることないって」

雅彦はそつと恵里子の手を自分の袖口から外し、安心させるように笑いかけた。

恵里子は何か言いたそうに口を開いたが、その唇から雅彦を引き留める言葉は出なかった。

「そつ、よね。ごめんなさい、急いでるのに……」

恵里子は軽くうなだれながら、小さく謝罪した。

そんな様子を見てみると、なんだか自分が悪いことをしたような気分陥ってしまう。

右手に触れる恵里子の掌は、冬だというのにじつとりと汗ばんでいた。

「もし、心配なら誰かに相談すれば良いじゃん。ばあちゃんとかさ。それに……」

それに恵里子には、父さんも母さんもいるだろ。

雅彦は、あとに続けようとした言葉を喉元寸前のところで止めた。恵里子に触れていた手を離し、別れの意味を込めてそれを振る。

夜の風は冷たかった。雪こそ降っていないものの、吐く息は白くなるほどだ。

しかし雅彦は、こんな寒い時期を気に入っていた。いや、暑い時期を極端に嫌っていただけなのかもしれない。

雅彦は、通りすぎる冬の風に気を良くしながら家路を急いだ。

夕飯の支度は雅彦の仕事なのだ。

終業式をサボろう！

そう決心したのは学校へ向かう坂道を登っているときだった。

道の脇にずらりと植えてある桜の木には、一枚の葉も付いていない。春になると毛虫でいっぱいになる道も、色の褪せた落葉を数枚乗せているだけだ。

(とは言っても、出席だけは出とかないとマズいよな)

終業式とはいえ、学校をサボると弘康に怒られる。ただ小言を言われるだけなら構わないが、それはそれは尋常ではないほどのペナルティーが課されるので、可能な限り、家への連絡は避けて通りたい。家に金が振り込まれず、一週間ゼリーで暮らす生活には懲り懲りだった。

仕方がない、と本日最初のため息を吐き、のろのろと歩を進めた。

二年生の教室は別館だ。薄暗い別館には夕方近くにならないと日の光が射し込まない。「学校」という空間はどこも不気味な雰囲気纏っているものであるが、この別館には良いものか、悪いものか、判断のつかない特別な空気が流れていた。

雅彦はそんな別館の雰囲気嫌ってはいなかった。これからもずっと此処にあり、この高校に通う二年生が通る道として在れば良いと考えているのだ。

雅彦は短い廊下を進み、もうほとんどの生徒が到着している教室へと入った。

あれだけ外は寒かったのに、どうして教室の中というのはこんなにも暖かいのだろう。

「熱気」とでも言うのだろうか？ 教室に足を踏み入れた瞬間、それまで感じていた「寒い」が「暑い」に変化した。

雅彦は廊下側の一番前の席に鞆を置く。「一番前」という避けられやすい席だが、雅彦はこの席を気に入っていた。

授業中、意外にも教師の視界に入らないという理由もあるが、一番は、午後の授業になると窓から射し込む夕日。それが嫌いだった

からだ。カーテンを閉めきつても眩しくて、とても授業に集中できない。

お気に入りの席に腰をおろし、左手で頬杖をつく。いつもの癖。別に暗い性格というわけでもないのだが、雅彦はクラスに友達と呼べる存在を持っていない。今年の初め 通称「友達作り期間」に何もしなかったのが一番の原因だろう。その代わりではないが、暇な時間を勉強に打ち込んだ結果、雅彦の成績は伸びに伸び、担任に「国立大も夢じゃない」と言わせたほどだった。

頬杖をつきながら、退院する桜子のことを考えているうちに、ホームルームの時間となった。担任が教室に入り、全員の点呼を取る。
(面倒臭いな)

雅彦は、やる気のないだらしない返事をしながらそう思った。一年生のときは、空いている席を数える先生だったので、サボるのは容易だった 机ごと教室から出せば良いのだ。

そういえば、去年の雪が降る寒い日に、机を校庭まで運んだら、机が凍ったっけ

そんなこと弘康には口が割けても言えないが、桜子には話してやるのか？

桜子のことを考えると、自然に口元が緩んだ。周りに気持ち悪いと思われたって構うものか！

気が付くと、クラスメイト達はもう体育館へ移動を始めているようだった。だれも自分に声を掛けない事実は、雅彦に一人も友達がいないことを感じさせた。

雅彦は、桜子のことを考えて出た自然な表情とは正反対の自嘲的な笑みを浮かべながら教室を出る。

もちろんクラスメイト達と共に、体育館へ向かうつもりなど毛頭なかった。 そんな考えは、朝、教室に入る前から消え失せていた。

(どこへ行くの?)

とりあえず、一刻も早く家に帰りたい。しかし、あまりにも早く

帰ると不審に思われることは必至だった。

兄さんは、かなり几帳面な性格だから……。

雅彦は考えを巡らせながら頭を掻いた。渡り廊下を通り、新校舎へと進む。

どこかで時間を潰してから帰宅すれば良いのだ。新校舎の空き教室なら十分に機能するだろう。

雅彦の足は、視聴覚室へと向かっていた。

生徒達は体育館へ向かったのか、新校舎には人の気配がなかった。もちろん視聴覚室も同様である。鍵は掛かっておらず、簡単に部屋に侵入することができた。

長机が並び、たくさんパイプイスが目についた。暗幕で覆われていない窓からは、朝の爽やかな日射しが照りつけている。先ほどまで居た別館とは大違いだった。

(映画を一本見てからにしよう)

雅彦は人っ子一人いない視聴覚室で、好みのビデオテープを探した。

「あれ？ 二年の……黒木？おはよー」

背後から声を掛けられた。

部屋の扉を開ける音は聞こえなかった。これはどういうことだろう？

しかし、そんな疑問はすぐに打ち消された。友達のいないはずの雅彦に話し掛ける人物なんて限られている。

だいたいの声色から判断すると、声を掛けた人物は秋原先輩だ。

雅彦の知る限り、秋原は特別友達の多いほうではない。それでも秋原は、愛想が良いわけでもない雅彦に何かと構っていた。よく授業をサボるので、こうやって遭遇することが少なくないのだ。

雅彦とは違い、意図的に学校で目立たないように行動していたため、秋原は自身の気配を消したり、音をたてずに移動することを得意としていた。

「先輩ですか？ 終業式くらい出たらいいのに……」

雅彦は振り向くと、ビデオテープが収納されている棚から離れ、秋原を睨んだ。

せつかく一人で映画鑑賞を楽しもうと思ったのに……。考えることは先輩も同じだったということか。

「そう睨むなよ。俺だって、朝の出席には出た」

秋原はそう答えながら手をヒラヒラと降り、笑顔を見せた。雅彦の眺めていた棚に目をやる。人の良さそうな表情。

これで友達を敢えてつくらないというのだから変わっている。

「映画かあ、俺はヘルニアよりユトリロより宇宙の皇女やつが好きだな」

秋原はそう言うと、ビデオテープの収納棚へ近づいた。必然的に雅彦との距離は近くなる。

（ユトリロは画家だろ？）

雅彦は間違いを正そうと口を開いたが、言葉を飲み込んだ。雅彦より先に秋原が声を発したのだ。

「あれはないのか？ あのー、皇女のやつ宇宙の」

そんなことを言いながら能天気棚を漁る。

なんてマイペースな人なんだろう。

そう考えていると、秋原は持っていたペットボトルの中身を口に含んだ。僅かに蒸気を発しているそれは、異臭を放っている。

（なんだ？ あれ）

雅彦は秋原の飲んでいるものが気になって仕方がなくなった。好奇心に負け、思わず訊ねる。

「ていうか先輩、何飲んでるんですか？」

秋原は漁っていた棚から離れ、手に持ったペットボトルを振って見せた。

「ホット林檎ジュースだよ。飲む？」

何でもないことのように言っただけ、相変わらず異臭を放つ物体を差し出す。

(林檎ジュース温めたのか?)

いや、でも意外と美味しいのかもれない。少なくとも生の猫よりは幾分マシな味であるはずだ。

一瞬、それを受け取るうという考えに達したが、どう考えても賞味期限が切れている。訳の分からない物体を体内に入れるのは躊躇われた。

「いや、結構です」

可能な限りやんわりとした口調で断った。掌を、顔の横で振る。

「そう……旨いのに」

残念そうな声色と共に、差し出していた手を引つ込める。蓋をしたそれを長机の上に置き、再び柵に向かいながら言葉を続けた。

「俺は温かい飲み物以外は飲まないんだ。コーラも温かいのが好きだけど、コンビニじゃあ温めてくれない……。でも購買のおばちゃんはいい人だ。コーラでもアイスでも温めてくれる」

雅彦からすると、とんでもないことを口走りながらも、秋原はビデオテープを探す手を休めようとはしなかった。しばらくの間、その動作を続ける。

「おお、あつた」

数分後、どうやら目当てのビデオテープを発見したようだ。右手に持ったそれを、得意気に翳す。

「先輩、俺そろそろ帰ります」

時計に目をやると、そろそろ家に帰ってもいい時間になっていた。今からなら、帰っても兄さんと鉢合わせになる心配もないだろう。

「何だよ、妹さんがそんなに大事か？」

雅彦は、秋原が桜子の退院を知っていたことに驚いたが、すぐに兄の仕業だということに気付く。

兄さん、言いふらし過ぎだよ。

嬉しいのは理解できるが、いかんせん田舎なので情報がまわるのが早い。

それは、ときに良い結果を生むが、必ずしもそうならないことを

雅彦は知っていた。そして、今回の場合は後者であることも……。

(……そういえば、)

桜子の話題が出ると、昨日の恵里子が見せた不可解な態度が思い出された。彼女が発した「怖い」の一言は、何に対するものだったのだろうか？

雅彦は帰宅する意思を明確にするため、中身のほとんど入っていない鞆を握りしめた。

「そういえば、恵里子が変わることを言っていました。蔵から声が聞こえた、とか何とか」

秋原はビデオテープのセットを始めていた。雅彦の言葉が耳に届いているのかすら分からない。ブレザーの袖口を捲り上げ、映写機を弄る作業に没頭している様子だった。

「蔵から……声？」

「ええ、何か知ってます？」

「蔵」の単語が出ると、秋原は途端にそれまで忙しく動かしていた手を止めた。ゆっくりと深呼吸をしてから雅彦の問いに答える。「黒木の本家にある蔵はヤバいつて聞いたことがある。弘康さんが学生の頃も死人が出たとか 必ず十代の人間が一人死ぬらしい。しかも分家から。そういう『儀式』をしてるって話も、あるにはある」

秋原の口調は決して重々しいものではなかったが、語られた内容は気分の悪くなるものだった。

雅彦だって、この辺りの事情には詳しいつもりでいたが、この話は初耳だ。

(でも恵里子は本家の人間だからなあ……)

これは安心して良いことなのかもしれない。もっとも、それ以前に秋原の言葉を完全に信じたわけでもないのだが……。

「なーんて、ただの迷信だと思うけど、気になるなら調べとくよ」

秋原は相変わらず明るい口調のままそう言っただけのけると、映写機を弄る作業を再開させた。

二章 共犯者（1）

せつかく退院したというのに、桜子が風邪を引いた。

雅彦は、終業式をサボったことを弘康が知らないことに安堵し、同時に一人で二階の自室で眠っている桜子を気の毒に思った。

「だから寝る前にはリップクリームを付けておけと言ったんだよ」
弘康が的外れなことを言いながら蜜柑を頬張っている。ミカンは綺麗に白いスジを取り除いていた。これでは一つ食べるのに随分と時間が掛かってしまうだろう。

心なしか、普段より機嫌が良い。休みの日だからだろうか？

「リップクリームと風邪は関係ないと思うけど」

リビングの掘り炬燵の温度は丁度良い。点けっぱなしのテレビは、いつものドラマではなく、休日特有の特別番組が流れていた。古代遺跡について、専門家が解説している。

「お前、分かってないなあ、リップクリームはあらゆる病気に特化した万能薬なんだぞ」

弘康は蜜柑を口に含んだまま話した。視線はテレビと、新聞のテレビ欄を行ったり来たりしている。

（よく夕飯のあとにあれだけ蜜柑食えるよな）

雅彦は三つ目の蜜柑に手を伸ばす弘康の胃袋が心配になった。

「それって金曜ドラマの『ヘルニア国の王女』じゃん。リップ付けたらぎっくり腰が治ったっていう……」

医者決め台詞に『リップクリームは万能薬なんです！』という言葉があった。人気のドラマで、シーズン二の制作が決定したらしい。

（っっていうかあのドラマ、兄さんも観てたのか……）

「そうそう、アレ今日はやらないのか？ 新聞には載ってないけど

……。今、ナウなヤングにバカウケしてるんだろ？」

弘康は相変わらず新聞のテレビ欄を見つめたままだ。

(そんな無理に新しい言葉使おうとしなくても……)

「今日はやらないよ。この前のが最終回。まあ、またシーズン二やるらしいけど」

雅彦が答えると、弘康は「へー」と生返事をしながら新聞を折り畳んだ。おとなしく、古代遺跡の番組を観ている。

「そういえば明日、親戚の集まりだから用意しとけよ」

なんてことはない、普通の日常会話だった。しかし、秋原から気分の悪い話を吹き込まれた雅彦は、弘康に問いかけずにはいられなかった。

「親戚の集まりって、兄さんは行かないの？」

雅彦は、弘康の顔を伺い、少しの変化も見逃すまいとしていた。にもかかわらず、弘康のそれに狼狽の色が浮かぶことはない。

「決まりなんだよ。本家の離れに一晩泊まるだけだ。十代じゃないと駄目なんだよ」

『十代じゃないと駄目』という言葉は、雅彦を安心させるどころか、むしろ不安にさせた。秋原の話によると、『儀式』に必要なのは十代の子供である。

「桜子はどうする？ 風邪引いてるし、行かなくても良いんじゃない？」

小学四年生の桜子は、最近十歳になったばかりだ。それでも十代であることに変わりはない。

雅彦のその問いかけに、それまでポーカーフェイスだった弘康の顔色が曇った。テレビの音量を下げ、左手で頬杖をつく。

「いや、それは困るよ。せっかく退院したのに……」

頬杖をつくとき、雅彦の位置からは弘康の表情を伺うことができない。くなる。

(『困る』ってなんだ?)

まるで、『親戚の集まり』のために桜子を退院させたような口振りだ。しかし、風邪をこじらせて、また病院の厄介になるのは桜子のためにも良くないだろう。明日には雪でも降りそうな天気だとい

うのに。

「でも、また肺炎とかになっ……」

「とにかく！ 準備しておけよ」

雅彦の台詞を途中で打ち切ると、弘康はテレビを消した。

（今日の兄さん、ちょっとおかしいな？）

普段の明るく振る舞いを知っている分、雅彦は弘康の行動に不信感を抱いた。彼が言葉を重ねることにそれは風船のように大きくなるばかりだった。

「風呂入ってくる」

弘康は押し殺した静かな声を発し、リビングから出ていった。先ほどまで良かった機嫌は、少し損なわれたようだ。

「じゃあ俺も、洗い物するかあ」

雅彦は頭を掻きながら呟く。炬燵の電源を切り、台所へと向かう。洗剤を泡立てて、慣れた手つきで皿を洗った。

（でも先輩の言っていた『儀式』とは関係ないよなあ）

もしあの話が本当だったら、明日集まるという親戚の誰かが『生贄』となるのだ。

（誰かが、死ぬ？）

いや、そんなはずはない。

雅彦は、自分の頭を一瞬過った恐ろしい考えを否定する。

そして、しばらく皿を洗う動作に没頭しながら翌日のことを考えた。

（十代の親戚なんて他に居たっけ？）

本家の恵里子ぐらいしか思い浮かばない。遠縁の親戚も来るのだろうか？ 先日見かけた貞一が存在が、一瞬だけ頭を掠めた。

洗った皿をタオルで拭き、食器棚に戻しているとき、弘康が風呂から出てきた。

「おう、風呂空いたぞ。明日は恵里子ちゃんも来ると思うし、仲良くしろよー」

雅彦は心のなかで、小さくため息を吐いた。

恵里子のお兄さんは東京で就職したらしい。だから本家の人たちは、恵里子と歳の近い雅彦に稼業を継いで欲しいのだろう。

「俺は、恵里子と結婚とか、そういうの考えてないけど……」

第一、まだ双方とも結婚できる年齢ではない。弘康もそうだが、雅彦の周りの人間は少し気が早いのだ。

「分かってるって、冗談だよ」

弘康は、濡れた髪をタオルで乱雑に擦りながら答えた。顔には笑みを浮かべ、口調も軽いものだ。

（でも冗談には思えないんだよなあ）

雅彦は弘康から顔を背け、食器棚に皿を並べることに専念した。

恵里子を嫌っているわけではないが、やはり跡を継ぐとか、そういうのはまだ早い。

「明日の準備、しておけよ」

弘康の声が背中から聞こえたが、返事をしなかった。

弘康は、雅彦の返事を初から聞くつもりがなかったのか、鼻歌を歌いながら台所から出ていった。

（自分は彼女取っ替え引っ替えしてるくせに……）

昔、家に三人ほど乗り込んできたときにはどうしようかと思ったものだ。そのなかには雅彦の同級生もいた記憶がある。

「……はあ」

先々のことを考えると、頭痛くなってきた。飲み物を取りだそうと、冷蔵庫を開ける。

（ウーロン茶、ウーロン茶……あった）

見た目で麦茶とウーロン茶の区別をつけるのは難しい。しかし長年、冷蔵庫に人一倍関わってきた雅彦にはそれをする能力が備わっていた。

全ての皿が綺麗に収まった食器棚を満足気に眺め、コップを一つ取り出す。

換気扇を止め、リビングへ出ると消したはずのテレビが点いていた。

（兄さんかな？）

初めはそう思ったが、リビングに弘康の姿はなかった。きっと応接間の隣にある自室にいるのだろう。

「あ、雅彦兄さん」

桜子だった。炬燵に座って、テレビを選曲して遊んでいる。

厚手のパジャマの上に、半纏を引っかけた姿だった。

「桜子、大丈夫なのか？ 熱は下がった？ 今、飯温めるよ」

雅彦は心配した声を発し、自分のために持っていたはずのコップにウーロン茶を注ぎ、桜子の前に置いた。桜子の夕飯を取りに、台所へと足を向ける。

「……知らない」

桜子はテレビを消して、小さく答える。雅彦から目を反らし、ウーロン茶をすすった。

「知らないって、駄目だろ。食べないと、良くならないし……」

雅彦の言葉に、桜子は反応しない。ウーロン茶に映った自分の顔を眺めるだけだ。

（もうこんな時間か……）

テレビの上の時計に目をやると、午後十時を回っていた。明日の準備もまだしていないというのに、やらなければならないことは山積みだった。

「アイスなら食べる」

雅彦のほうを振り向き、桜子はそう言った。子供らしい笑みを浮かべ、苺アイスをねだる。

（いや、アイス食べるのは良いけど……それだけかよ）

桜子は同学年の友達と比べて、小さいほうだ。身体が弱い理由にも一役買っているのかもしれない。

（それに、俺が飯食わせてないみたいじゃないか？）

以前、学校の授業参観の「好きな食べ物は？」という質問で、桜子が「ふりかけ」と答えたことがあった。

雅彦もその場において、頭を壁に打ち付けたい衝動に刈られたのを覚えている。

「アイスじゃ薬飲めないだろ。せめて味噌汁だけでも飲んでよ」

雅彦はそう言いながら、桜子の薬を探す　　大事なものは全て入っていると言っても過言ではない神棚だ。

「……わかった。アイスは莓味じゃないと駄目だから」

唇を尖らせて答える桜子は、普段よりずっと幼く見えた。莓味が好きというのもかわいらしい。

「分かったよ。今持つてくるから」

雅彦は、そう言い残すと再び台所へと足を向けた。

そして、コンロにかけたままの鍋に残った味噌汁を容器に注ぐ。

(やっぱり、ご飯もいるよなあ)

明日も出かけるし、いくら本人が「いらない」と言ったからといって、病人に対してご飯を与えないとなんだか気分が悪い。

雅彦は炊飯器からご飯を茶碗に移し、今日のおかずであった焼き魚と煮物を温める。そして、それらを用意すると桜子の居るリビングへと運んだ。お盆に乗せて、丁寧に。

リビングに戻ると桜子は相変わらず炬燵に座ったままテレビを眺めていた。ミイラについてを専門家が詳しく語っている。

雅彦は、料理の乗ったお盆を桜子の前に置いた。空になったコップに再びウーロン茶を注ぐ。

「雅彦兄さん」

桜子はテレビに目をやったまま、雅彦に話しかけた。上目遣いが可愛らしい。

「きんしんそーかん、って何？」

雅彦は、桜子の口から出た言葉の意味を、直ぐに理解することができなかった。しばらくの間あんぐりと口を開けたまま、動きが止まる。

当の桜子はというと、箸を手に取り、ゆっくりとご飯を口に運んでいた。食欲がないながらも、一口食べれば箸は進むものだ。

(冷静になるんだ、俺。俺は別に何もやましいことはしていない。

……考えたことはあるけども)

雅彦は大きく深呼吸をし、桜子のほうを見る。

近親相姦、って言ったよな？

確かにそう聞こえた。しかしなぜ、まだ小学生である桜子があるような単語を知っているのだろうか？

（まあ、桜子はその気なら、俺はいつでも……、って冗談冗談、今のナシ）

雅彦は混乱した頭を抱え、目についたニリツトルのペットボトルに入ったウーロン茶をそのまま飲んだ。コップを出すという考えは、彼の頭では導き出すことが出来なかったようだ。

「雅彦兄さん、わたしの話聞いてた？」

桜子の視線はテレビ画面を見つめたままだ。先ほどまで動いていた箸は、完全に止まっている。

「うん、聞いてたよ。近親相姦だろ。……親戚同士で結婚とかがそうだな」

上ずったり、不可解な抑揚のついた声飛び出すかとヒヤヒヤしたが、思いの外普段通りの声が出て、雅彦は安心した。

可能な限りオブラートに包んだ言い方だったが、雅彦の狼狽は消えなかった。自分の心を見透かされているような、そんな気分だったからだ。

桜子は、宣伝画面に変化したテレビから視線を外し、雅彦のほうを向いた。

「分かった。ご飯もういいから、アイス頂戴」

「お、おう」

桜子の要求に短く了解の返事をする、雅彦は、まだ半分は中身の残っている食器を片付けた。味噌汁などの液体が溢れないように静かに台所まで運ぶ。

（あとで猫の餌にでもしよう、まだ残ってればだけど……）

まあ、貞一に殺されたとしても、野良猫なんていくらでも増えるものだろう。

雅彦は、冷蔵庫から苺アイスを取り出した。最後の一つ。

「莓味でいいんだろ？」

リビングに戻った雅彦は、桜子の隣に腰をおろした。炬燵の中は暖かい。

「うん、ありがと」

雅彦の差し出したカップアイスとスプーンを桜子は笑顔で受け取る。

（かわいいなあ）

熱のため、頬を赤くした桜子に雅彦は釘付けになった。カップの蓋を開けるのに苦戦している様子もまた、彼の視線を奪う理由の一つだった。

（でも、なんで近親相姦なんて言葉知ってるんだ？）

することのなくなった雅彦は、点けっぱなしのテレビ画面に目を向けた。昔の王朝は、近親相姦で奇形児が産まれたという内容。ミイラの作り方は終わったらしい。

（ああ、それがか）

テレビ画面を眺めながら、雅彦は一人納得した。同時に、おかしな勘ぐりをした自分に羞恥心を覚えた。

ふと、桜子のほうに目をやると、彼女はほどよく溶けたアイスクリームをスプーンで口に運んでいた。一口一口をゆっくりと味わう動作。

「そついえば……」

桜子は思い出したように口を開いた。スプーンの動きを止め、雅彦を見る。

「もし、恵里子さんと雅彦兄さんが結婚したら、きんしんソーかんになるの？」

桜子の質問に、雅彦はため息を吐いた。どうしてこう、おかしな冗談が広まっているのだろうか？

（恵里子とはそついうんじゃないのに……）

確かに雅彦は、本家の人たちに悪く思われてはいない。むしろ好かれている。恵里子とも歳が近い。

でも、だからって……

雅彦は、弘康がそうしたように左手で頬杖をついてみた。こうすると、桜子の位置からは雅彦の表情が伺えないはずだ。

「従兄弟とは、近親相姦って言わないんだよ」

小さな、呟くような声で言う。桜子にはこの声が聞こえたのだろうか？

「……兄さん？ 雅彦兄さん」

桜子は、雅彦の様子の変化に心配した声色で話しかけた。

(どうしてこう、上手くいかないんだろう)

雅彦は、再び小さなため息を吐き出すと、頬杖を止めた。すると、桜子の心配した表情が視界に入る。

(触ってみたい)

そう思うと、もうその衝動を抑えることが出来なかった。躊躇なく、桜子の額に右手を伸ばす。

「まだ熱あるな、アイス食べたのに……」

桜子は突然のことだというのに狼狽の表情すら浮かべない。呑気に「アイス食べたぐらいで熱下がらないよー」と語尾を伸ばした。

右手に触れる桜子の前髪を、ひどく繊細なもののように感じながら雅彦は考えた。

(どうして、従兄弟は良くて、兄妹は駄目なんだろう?)

二章 共犯者(2)

次の日、桜子の熱はいくらかマシになった。

弘康は「朝が早い」と言っていたが、雅彦たちが本家の離れに着いたときは、もう十二時を回っていた。そんなに急ぐ必要はなかったのだ。

到着した途端、まだ建物の中にも入っていないのに話しかけられた。

「こんにちは。黒木雅彦さん……ですか？ 僕、神崎周一といいます」

周一は、ひよろりと痩せた背の高い人物だった。手には大きく膨れたコンビニの袋を提げている。

(神崎……って東京にいるっていう？)

雅彦は周一のことを思いだそうと、必死に頭を回転させた。古い記憶を探っても「東京にいる」という情報しか導くことができなかった。

「どうも、黒木雅彦です。こっちは妹の桜子」

ずっと黙り込んでいても仕方がないので、とりあえず人当たりの良さそうな笑顔を浮かべ、挨拶をした。隣にいる桜子は相変わらず元気がない。

周一はそんな桜子に声をかけた。

「桜子ちゃん、苺好き？」

そう言って手に持ったビニール袋から苺大福を取り出す。ピンク色をしたそれは可愛らしい見た目をしていた。

「いや、いいよ。悪いし……昼飯なら食ってきたから」

雅彦は桜子の手を引き、周一から遠ざけた。親戚とはいっても遠縁だろう。あまり関わり合いになりたくない、というのが正直な気持ちだった。

「いいじゃないですか。夕飯の買い出しに行っただついでに買ったん

です。まさか片道三十分もするとは思いませんでした……駐車場は無駄に広いし。雅彦さんもいります？」

周一はなおも葎大福を勧めたが、雅彦がそれを受け取ることはなかった。建物の中から恵里子が姿を見せたのだ。くるぶしまで伸びた、チエツク柄のスカートを履いている。コートも着ずに、寒くはないのだろうか？

「あれ？ 雅彦さん。こんにちは」

恵里子は雅彦の姿を見つけると、駆け寄りペコリと頭を下げた。二つに縛った長い髪が揺れる。

「ああ、恵里子。桜子の具合が悪いんだ。見てやってくれよ」

雅彦は恵里子に桜子を預けることにした。具合の悪いとき、雅彦が干渉するのは桜子が嫌うからだ。

「ええ、分かったわ。じゃあ桜子ちゃん、行きましょう」

恵里子はふわりと笑うと、雅彦の頼みを二つ返事で了承し、桜子の手を引いた。そして、離れの建物へと消えていく。

(寒い)

この地域の冬の冷たい風は乾燥している。弘康の言う、リップクリームが大事というのも、あながち嘘ではないのかもしれない。

「寒いですし、僕達も入りましょう」

周一はコンビニの袋を左手に持ち代えながら言った。言葉を紡ぐ度に、吐く息が白く現れる。

「そうだな」

二人は早足で、建物へと進んだ。

「離れ」という言葉を使っても、その建物は立派なものだった。何坪あるのかは分からないが、古い、趣のある建造物であることは間違いない。

雅彦は寒いというのに縁側に腰かけて、見事に広がる日本庭園を眺めていた。

「あー、雅彦さん」

振り返ると貞一が立っていた。話しかけているはずの雅彦の目を見ず、肩ごしの何かを見ているようだった。

「何？　どうかした？」

こうして向かい合っていると猫を食べていた貞一が思い出される。
(昔は、あんなことする子じゃなかったんだけな……)

以前は部屋の隅を指して、おかしなことを口走る程度だった。いつからこんな奇行が目立つようになったのだろうか？

「『頭がパー』ってどんな意味があるんです？」

雅彦は、貞一の言葉に一瞬言葉を失った。

(いじめられてるのか？)

しかしそれも無理のないことなのかもしれない。彼の奇行から察するに、いじめられる素質は十分だろう。

「なに、いきなり。そんなこと言われたの？」

雅彦は出来るだけ落ち着いた声を出そうとしたが、その声色には動揺の色が伺えた。

貞一は眼鏡の位置を僅かに変え、相変わらずボーとした、どこを見ているのか分からない目で雅彦の向こう側を見つめていた。

「ええ。学校のクラスメイトに。『気違い』とかはまだ意味分かったんですけど……」

雅彦は、『友達』という言葉を使わないことが気になったが、それ以上にそんなことを言われてもケロリとしている貞一に驚いた。

「『気違い』て言われたの？」

「ええ。でもまあ、慣れてますから」

(慣れてるのか……でも、猫食べるのはいかんだろ)

雅彦は呆れつつも、クラスメイトに気違い呼ばわりされて『慣れたる』と言い切ってしまう貞一の精神の強靭さに驚いた。

しかし貞一は、ただ単に他のことには興味がないだけなのかもしれない。

「雅彦さん、台所手伝ってくださいよ」

台所から周一の声が聞こえた。ケーキでも作っているのだろうか？
「ごめんごめん。今手伝うよ」

雅彦は貞一に慰めるような笑顔を向けると、台所へと歩き出した。床は軋み、今にも壊れそうだった。壁に空いた穴は鼠が齧ったのかどうかは分からないが、ひどく汚れていた。

雅彦は、なぜ自分たちがこんなボロ屋敷に一日でも宿泊しなければならぬのかを疑問に思った。

「すみません。恵里子さんは桜子ちゃんをみていて……これ、皮剥いてもらえます？ 僕はケーキ作るんで」

(本当にケーキ作るんだな……)

差し出されたのは大根、じゃが芋、人参だった。煮物でも作るのだろうか？

雅彦は慣れた手つきでそれらの皮を剥いていく。

「上手いもんですね。雅彦さんはよく料理するんですか」

周一は、ケーキのスポンジをかき回しながら雅彦の手元を覗き込む。

(そういえば、昔は皮むきが嫌いだったな)

「うーん、頻繁にするようになったのは母さんが死んでからかな」
以前は苦手だった料理も、最近ではもう生活の一部となっていた。母が亡くなって、長い年月が経ったことが思い出される。

「へー。もう五年でしたっけ？」

周一は、何かを思い出すように右上を見つめながら答えた。あまり触れてはいけない話題になってしまったという自覚はないようだ。
「そうだな。来年の夏に七回忌だから」

雅彦は返事をしながらも、「五年」という年月が長かったのか、短かったのか判断することができなかった。

「ところで、隣の神社。ちよつと不気味じゃありません？」

台所の小さな窓からは、神社が見える。昼間だというのに陽も当たらず、周りには背の高い木が鬱蒼を茂っている。

(昔は、あそこでダンボール滑り台やったなあ)

神社の周りの山は、勾配がひどかった。木々もたくさん生えており、危険極まりない場所であったにも関わらず、子供たちはそこで滑り台をして遊ぶのだ。

（雪が降ったときが、一番楽しかったな）

「そうかな？　神社なんてあんなもんだと思うけど」

雅彦は、台所の小さな窓から見える神社を見つめた。クリスマスイブだというのに雪が降っていない。

少し落胆したが、雪が降らないということはそれほど寒くないということだ。寒くないというのは桜子の身体にも良いことなので、喜ぶべきことなのかもしれない。

「雅彦さんは神道なんですか？」

雅彦の、神社を見つめる顔つきを不思議に思ったのか周一が尋ねた。この辺りは神道の家が多い。葬儀も仏教のほうがマイナーだ。

「いや、特に決まっていはいないけど……家はそうだな。神棚とかあるし、周一君は神道なの？」

雅彦の問いかけに、周一は一瞬の躊躇いもなく返答した。

「そんなのある訳ないじゃないですか。確かに家はそうですね、僕は聖像崇拜したいんですよ」

（聖像崇拜？　ああ、御神体……とかか？）

確かに神道には御神体とか、唯一神という存在はない。ということとは、周一は仏教徒なのだろうか？

「聖像崇拜って、仏教？」

「いえ、キリスト教です。カトリックの」

周一は、またすぐに答えを返した。

（かとりつく、って外国の宗教かな？　やっぱり東京の人は凄いな）
聞いたことのない横文字に雅彦は首を捻る。宗教のことには詳しくないが、それでも何とかそれらしい返事をした。

「へー。それはまた、ハイカラな」

「宗教に古いも新しいもないというのが僕の持論なんですけどね。でもそのこととケーキは関係ないですよ。ただ僕が好きなのです。」

本当はこんなところに居ないで、家族でのんびり過ごしたいんですけど、まあ親戚なんで妥協します」

周一は、都会人に対する羨望の眼差しを一蹴した。混ぜせいたケーキのスポンジの様子を確認し、ため息を吐く。

（妥協って……本人目の前にして言うか、普通）

周一の態度に、雅彦は些か腹をたてた。唇を噛み、眉間には皺を寄せる。

そんな雅彦の態度に気が付いているのか、いないのか、周一は何食わぬ顔で会話を続けた。

「どうして僕達、今日一日ここに居なければならぬか知ってます？」

周一の言葉に、雅彦は少し狼狽した。秋原の言っていた『儀式』の話が嘘だとしても、昨晚の弘康の態度は明らかに普段とは違うものだった。

「分家から一人、死ぬんじゃないかと思うんですけど……」

（周一君も、知ってるんだ。あの話）

この辺りに住んでいないからと言って、『儀式』のことを知らないというのは考えにくい。周一もまた、雅彦と同じように疑心暗鬼に陥っているのかもしれない。

「おいおい、物騒なこと言うなよ」

可能な限り明るい声を出したつもりだった。周一の抱いている疑惑だけでなく、自分も感じている違和感を吹き飛ばそうとしたのかもしれない。

しかし周一は、あくまで冷静に、現在の状況を分析しているかのように目を細めた。

「どうですかね？ 本家の人達は、神道じゃなくてもっと怪しい宗教に入っているのかもしれませんが？ 所詮僕達はごく潰しなんですから」

（なにもそんな言い方しなくても……）

雅彦は、自分達を「ごく潰し」と言い切ってしまう周一を驚いた

目で見た。

周一のほうも、雅彦の考えが分かったのか言葉を続ける。

「だってそうじゃないですか？ 雅彦さんだって、お兄様の給料でご飯食べてるわけですし……」

（そこなんだよなあ、問題は）

長年、本家の経営する会社で働く弘康のスネを齧ってきたと言っても過言ではないのだから、恵里子との結婚話も断り辛くはある。

「でも、雅彦さんは大丈夫ですよ」

雅彦の顔が渋くなったのを、どう解釈をしたのか分からないが、

周一は雅彦を安心させる言葉を紡いだ。

「だって、もうすぐ本家の人間になるんですから　でも、本当に恵里子さんと結婚するんですか？」

「それは……」

周一の質問に言葉が詰まる。でも、だからって雅彦にどうしろと言っのたろう？

周一は意外な提案をした。恐ろしい計画。

「恵里子さんは、蔵から声を聞いたって言ってました」

「その話は俺も聞いたよ、恵里子から」

そう、でも使われていない蔵から声が聞こえるなんて、非現実的なことはない。聞き間違いと取るのが最も合理的だ。

「本家の人達……恵里子さんのご両親も知っているはずですよ。多分、おじいさん達も」

周一は声を低くした。それまで聞こえていなかった風の音や、蛇口から水滴が零れ落ちる音が鼓膜を振動させる。

「ならそれを使わない手はありません。『今回』なら、恵里子さんが生贄になってもおかしくはないんです」

周一はきつと、この『儀式』と『蔵から聞こえる声』というのは何らかの関連性があると言いたいのだろう。

「でも。流石にそれは……」

そうだ、結婚したくないからって相手を殺すなんて芸当をするつ

もりはない。

結論を渋る雅彦に、周一は言葉を重ねる　　ゆつくりと、語りかけるように。

「大丈夫です。僕の予想が当たっていれば、今日の夜あたり、誰かが僕達の誰かを殺しに来るはずですよ　　きっと、僕か貞一君が選ばれるでしょう。」

でも……その前に恵里子さんが死んでいけば、僕は死ななくて済む。

僕だつてまだ死にたくありませんからね。どうですか？　僕に任せてください」

周一の説得は、雅彦の頭には入ってこなかった。

(恵里子と結婚したら、桜子とは居られないよなあ)

昨晚の桜子の笑顔が頭を過ぎる。　　一瞬の気の迷い。

気が付くと、雅彦は静かに頷いていた。

周一はスポンジをかき回していた手を止める。

「二人だけの秘密、ですよ」

桜子の様子が気になった雅彦は、台所を周一に任せて階段を上がった。

この離れには以前一度だけ訪れたことがある。たしか、二階には寝室があったはずだ。

古く、変色している階段は、体重を移動させる度に軋んだ音をたてる。別にやましいことをしているわけではないのに、その音は雅彦を不安にさせた。

「ここだな、きつと」

階段を上がりきると、ずらりと六畳の部屋が並んでいるのが見えた。きつと客間として使用するのだろうが、それにしたつて数が多い。

雅彦は、唯一閉まっている襖に手をかけた。ゆつくりと右にずら

す。

部屋には恵里子と桜子が居た。布団に横たわった桜子は眠っている。その隣で、恵里子は小さな文庫本を読んでいた。

恵里子の姿を目にした途端、雅彦は罪悪感に苛まれた。先ほどの周一とのやりとりが思い出される。

「雅彦さん。桜子ちゃんなら大丈夫よ」

恵里子は襖が開いた音で、雅彦の存在に気付いたようだった。桜子を起こさないように声を低くして言う。

「そ、そう。俺はここにいるから、恵里子は下行って来なよ」

雅彦は恵里子の隣に座った。

恵里子が出たのほうを見るのが視界の端に写ったが、雅彦の視線は桜子だけに向けられていた。

「そうね、周一君の手伝いでもしてくるわ」

恵里子はそう言い残すと、持っていた文庫本に琴を挟んだ。

(ドストエフスキーかよ 何でこの時期に……)

ちらりと視線を移動させると、そんな文字が表紙を飾っていた。

寒い時期に寒い場所の話を読むのを雅彦は嫌っていた。暑い時期も同様である。本の中だけでも暖かい想いをしたいのだろう。

「じゃあ」

恵里子は音をたてずに立ち上がると、襖の向こうへと消えていった。

恵里子のいなくなった部屋は、相変わらず静かだった。聞こえるのは、桜子の寝息だけだ。

(……そういえば、恵里子は俺の言うことに逆らったことがないな) そうなのだ。恵里子は雅彦の言うことに逆らったことがない。忘れ物を届ける、といえば中学生にも関わらず雅彦の通う高校までやって来た。宿題を代わりにやらせたこともあった。……もっとも、正解率は壊滅的であったが。

「死ぬ」って言ったら死ぬのかな？

雅彦は自分の頭に浮かんだ考えをすぐに打ち消す。

(いやいや、嘘嘘。だいたい周一君だって本当に恵理子を殺すかどうか)

周一のあの躊躇いのない言動は、本気でものを言っているのか、そうでないのか、混乱させる何かがあった。

雅彦は混乱した頭を鎮めるため、部屋にある大きな本棚に目を留めた。古い、染みだらけの本棚だ。誰が集めたのか分からないが、大きいはずの本棚に、収まりきらないくらいの量の本があった。入りきらずに、横向きに入れておかれている本もあったほどだ。

(温かい地域の話って中々ないんだよなあ)

漫画本はないかと探してみたが、残念なことにそれは見つからなかった。

「雅彦さん？ 居ます？」

そのとき襖が開き、顔を覗かせたのは周一だった。何を考えているのか分からない表情だ。それはどこか、弘康のポーカーフェイスと似ていた。

「もう、出来ないほうが良いですよ」

(はい？ それはどういう？)

せっかく作ったケーキや煮物を食べることができないということなのだろうか？

雅彦は、周一の話している言葉の意味を理解することができなかつた。

周一は表情を変えずに、淡々と言葉を続ける。

「まだちよつと息はありますけど、もう時間の問題かと」

周一はポケットから腕時計を取り出して時間を確認した。雅彦も時間が知りたかったが、殺風景な部屋には時計が置いていなかった。(本棚はあんなに立派なのに、時計がないなんて……)

「ケーキに砒素を入れました。鼠の駆除剤があったので、それで……」

周一の態度で、雅彦はやつと状況を把握することができた。

つまり、もう本当に恵理子を……

「もう死んだかなあ？ ちょっと様子見てきますね」

周一はそう言い残すと、部屋を出て行った。何も感じていないような表情のまま。

(本当にやったのかよ……)

啞然とした雅彦は、周一が通過した襖をたつぷり一分間は凝視していた。

面白いことに何も感じない。罪悪感とか、虚無感とか、漫画本が見つからなくて感じた落胆も、何も感じなくなっていた。唯一、安堵という感情だけがかかるうじて残っていたのかもしれない。

どのくらい時間が経ったのか、分からない。気が付くと、窓から差し込む光がオレンジ色になりかけた頃になっていた。

「にいさん？」

布団で寝ていた桜子が動いた。いったいつから起きていたのだろう？

(まさか、周一君との話を聞いたとか？)

雅彦は狼狽を必死で隠し、桜子の様子を伺った。

「ど、どうした？ まだ飯にはならないみたいだけど……」

雅彦は我ながら、動揺を隠すのが下手だと実感した。これでは桜子に何か勘ぐられてしまってもおかしくはない。

「まさひこ、にいさん？」

桜子はそう言うってから眠たそうに欠伸をした。子供らしく、可愛らしい動作。

まだ頭がしっかりしていないのか、その瞳は完全に開けられていない。

「えりこ、さんは？」

恵里子の名前を聞くと、雅彦は無意識に襖に目をやった。先ほど周一が消えていった襖。

まだ恵里子は元気に生きていて、二つに縛った髪を揺らしながら

現れるのではないか？そんな気がしたからだ。

「恵里子は……」

自分でも信じがたい現実を口にするのは躊躇われた。なんせ、周一と雅彦は『共犯者』なのだから。

襖に向けていた視線を桜子へ移すと彼女は小さく寝息をたてていた。その額に掌を当てると、昏間より熱が上がっていた。

雅彦は堪らなくなり、桜子の唇を指でなぞった。今まで触れたことのない場所。

(……柔らかい)

いけない事だというのは十分に理解していた。それでも雅彦は実行に移したのだ。

自分の口唇と桜子のそれを重ねた。ほんの一瞬、触れるだけ。

周一に殺害計画の同意を迫られたときの「魔がさした」というものとは正反対だ。もしかしたら、ずっとそうしたいと願っていたのかも知れない。

規則正しい寝息をたてる桜子の傍らで雅彦は満足気な笑みを浮かべた。

(恵里子が死んで、良かつのかも知れない)

これですつと桜子の側にいることが出来る、と。

三章 告白文

御葬式の日、以来でしようか？

お久しぶりです。斎藤貞一です。

恵里子さんが亡くなつて、僕も色々と思うところがありまして、こうして手紙を書いていきます。

御存知かもしれませんが、僕は視力が悪く、それが理由というわけではありませんが、読んだり、書いたり、といったことが苦手なのです。

ですから、ここで書く文章が御菓子なことになつていても、最後まで目を通して下さることを願います。

さて、僕がこの手紙を書こうと考えた一番の理由は「恵里子さんの死」です。

僕の「今知ッていること」を形として残しておかないと、大変なことになるのでは・・・と思いました。

それは「本当のこと」なのです。事実、なのですよ。

雅彦さん。貴方は猫を食べている僕に対して「美味しいのか？」と訊ねましたよね？

美味しい筈がありません。

だッて猫なのですから。

調理などをすれば、それなりに食べられる味になるのでしょうか、僕は生で食べています。

それにはちゃんとした理由があるのです。まずはそこからお話します。

猫は殺したほうが良いのです。そして、それを食べることで「現在」の『地球人』が守られるのです。

「現在の地球人」という言い方をしたのは、「未来人」や「幽霊」や「宇宙人」が存在しているからです。

本当に、存在しているのです。

猫を調理しない理由はそこにあります。調理してしまうと「数字」が失われてしまうのです。

「数字」というのは、よく数学や物理の時間で使用するものとは少し違います。

悪魔で、喩えとして便宜的に「数字」という言葉を使っています。「数字」を説明するのはとても難しいことです。概念として存在しているものですから説明の仕様がないうです。・・・

「権力」という単語が、一番びつたりの表現であるような気がします。

「数字」そのものが「権力」を持つている、という言い方をしたほうが良いのかもしれませんが。

トランプが一番例えやすい例なのです。……「一」から「十三」の数字がありますよね。

「一」が一番弱く、「十三」が一番強い数字です。因みに、人間の持つ数字は「十」です。脳が発達しているので、その数値なのだと思います。

必然して、キツと、脳のない人間はもつと弱いのだと思います。さて、猫ですが、普通の猫はだいたい「十二」程度の数字を持っています。しかし、黒猫に至ってはその限りではありません。

黒い猫は「十三」の数字を持つているのです。

一ツしか変わらないじゃないか！

と考えるかもしれませんが、その一ツの差は大きいのです。僕は今まで生きてきて、黒猫意外に「十三」の権力を持つている生物を見たことはありません。

「十二」と「十三」は違うものなのです。

次に、前述した「未来人」「幽霊」「宇宙人」について、説明します。

・・・何から話したら良いでしょう。迷ってしまいます。

では、まず宇宙人から説明します。

宇宙人というのはよく、UFOに乗っている、と思われがちですが、そんなことはありません。

宇宙人は『現在』のものですが、言うまでもなく『地球人』ではありません。しかし、『地球人』でないからといって、地球に住んでいないわけではないのです。

例えば、天狗や河童。彼等は只のお伽噺の世界の住民ではないのです。

平安時代に地球を侵略しようと画策していたようですが、僕達のような『数字』の概念を持つた地球人のお陰で、彼等は地球から出て行きました。

現在も地球に生息している宇宙人のなかで、最も有名なものは象です。動物園で簡単に見ることの出来る、鼻の長い生き物ですよ。

今、地球に居る象のほとんどは火星人了。火星ではああいった形態の生物が多く生息しているのです。

勿論、よく世間の人達がイメージする『宇宙人』の形を取っているものも居ます。

しかし、それは本当の『宇宙人』ではないので後述することにしてしましよう。

雅彦さん、よく『在るはずの物が無くなる』ことツてありませんか？

例えば、テレビのリモコンだったり、屋根裏に仕舞ッておいた冬の服だったり。例えば、レストランで最後に食べようと思ッて取ッておいた数本のフライドポテトだったり、鞆に入れッばなしの割り箸だったり。

一ツ位は心当たりがあるでしょう？

僕だツて経験ありますし・・・。無いとは言わせません。

僕も、昔は 数字の概念を知る前の話ですけど・・・自分の不注意で無くしたと考えていたのです。

ところが、どうでしょう。

それは『間違い』だったのです。

宇宙人（正確には宇宙人の手先）に『隠され』ていたのです。

彼等は度々、そういった嫌がらせをします。僕達が気分を害し、苛々する毎に数字を奪われるという仕組みです。

そういった工作をする宇宙人の手先は、僕が知る限り全員、似たような容姿をしています。 小さなおじさんです。

十〜二十センチメートルほどでしょうか？

最近、侍の格好をするのが流行っているようで、チョンマゲを結っているものが多く存在しています。

『宇宙人』は彼等を遣い、昼夜地球人を苛々させることに労力を費やしています。

人によつては、小さいおじさんを『幸運の象徴』と考える人も居ますがそれは間違いです。『幸運の象徴』でも『不幸の象徴』でもありません。

彼等は『隠す』ことが仕事なのですから。

では、次に『未来人』の話をします。

彼等はれっきとした『地球人』です。

UFOに乗っているのも彼等未来人なのです。

UFOは時空間を移動する、いわばタイムマシンのようなもので、そのUFOに乗っている未来人（宇宙人のような見た目） 大きな瞳に細い顎、蒼白い肌は未来人の特徴でもあります。

大きな瞳は視力の低下が原因です。固いものを食べなくなったので顎が退化し、細くなります。

そして、蒼白い肌ですが・・・これは放射能の影響です。

UFOが発明された頃の未来では、第三次世界大戦の後の『核の冬』が起こっているのです。アニメのムーンは未来人の姿を描い

ているとも言われています。

しかし稀に、被曝していない未来人も居ます。地底人です。

どのような歴史を辿ったのかは知りませんが、地底人は核の冬を経験していません。見た目も普通のおじさんで、アジア系の人が多いです。

地底人は、UFOの不時着が原因で地底に居るらしいのです。おじさんが多いのも、UFOには大人の男性しか乗ることが出来ないという事情があるからです。

地底人にはあまり害はありません。どちらかということ、核の冬を経験した未来人のほうが脅威です。

彼等は自分達を『宇宙人』と言い張り、未来を変えようとしています。それには数字が必要ですから、地球人を殺すこともあるし、拉致することも度々します。キャトルミューティレーションの噂も、彼等の仕業だと言われていますが、実際は、彼等が自分達で創作した話を広めただけです。

『未来人』には十分に気を付けて下さい。数字を奪われないように……。

最後に、幽霊（過去の人）の話をしませう。

彼等はあまり数字を持っていませんから、脅威となることは少ないでしょう。稀に『呪い』という術で、数字を奪おうとしてくるので、それには注意した方が良いでしょう。

幽霊は『水』で生きています。水回りでの目撃例が多いのも、そういう理由からです。

仏壇（雅彦さん家は神棚でしたね）に供えた食べ物がカラカラに渴くのは、幽霊が食べてくれたからなのです。

必然して、幽霊を撃退することは簡単です。乾かすのですよ。ドライヤーとかで大丈夫だと思いますので、雅彦さんも試してみてください。

しかし残念なことに、世の中そう簡単には構成されては居ません

でした。

これは、僕の最も恐れていることなのですが、『幽霊』には二種類有ります。

『死んだ』者と、『見えなくなつた』者、です。同じ『幽霊』でもこの二ツは全く違うものなのです。

まず、ドライバーなどで簡単に撃退出来る者です。彼等は、『幽霊』の中でも『死んだ』者です。 恵里子さんはこのタイプだと思つので、安心して下さい。

そして、もう一ツは・・・『見えなくなつた』だけの者です。呪いをかけたり出来るのは彼等しか居ません。

『見えなくなつた』者は生きていますから、数字も九〇十程度持つて居ます。

呪いを使つて、『見える』ようになるために数字を奪つのです。

数字は、増やすことも難しいですが、減らすことも容易ではありません。

大体の物体は、数字を増やそうとしています（僕もその一人）が、減らそうとしている者を僕は一人だけ知っています。

この場では、怖くて書けません、彼は『見えなくなつた』者だということを知りました。

『宇宙人』 『未来人』 『幽霊』

彼らは皆、『『現在』の『地球人』』の地位を奪おうと画策しています。

それは「数字」が僕に教えてくれたのです。

猫を殺害し、それを食べることで、数字を奪えます。

だから僕は猫を食べなければならぬのです。

体内に数字を取り込むことで、僕たちは安全な地位に上りつめることになるのです。

四章 猫をも殺す好奇心(1)

恵里子の死は、周一が予想したように、大きな問題とはならなかった。

地元の開業医はアツサリと死亡診断書を書いたし、本家の人間も必要以上に騒ぎ立てたりはしなかった。

「雅彦兄さん。何読んでるの？」

一月も四日を過ぎると、弘康は仕事で家を留守にすることが増える。新学期までの数日間、家には普段通り、桜子と雅彦だけが残っている。

桜子は卓袱台で手紙を読んでいる雅彦の隣に腰をおろした。

「んー。貞一君からの手紙だよ」

雅彦はそう答えながら、素早く手紙を折り畳んだ。

(こんな内容の手紙、見せられるはずがない)

宇宙人だの未来人だの、発想がまるで小学生だ。桜子でさえ、サンタクロースを信じていないというのに……。

(そもそも貞一君はおかしな行動が目立つ)

雅彦はふと、新潟での貞一の暮らしぶりが気になった。

「ふーん。わたしあの人嫌い」

桜子が突然不機嫌そうな声を出す。正座していた足を前に投げ出し、両腕を後ろについた。

雅彦はそんな桜子の一挙手一投足を目で追った。僅かに尖らせた唇を見ると、自然にあのクリスマススイブの日が思い出される。

「どうして？」

「だって、あの人。サンタクロースはいないけど、代わりに宇宙人がプレゼントを届けるって言うんだもん。子供には夢を見せてあげべきなのに、大人気ないよ」

小学四年生とは曖昧な時期だ。大人の事情で、「中学年」とも「高学年」とも呼ばれているのも、理由の一つなのかもしれない。サ

ンタクコースを信じていないのに、大人が公然とそれを否定するのを嫌がる。

子供扱いして欲しいのか、大人として接して欲しいのか、雅彦には桜子の考えがまるで分からなかった。

(かわいい)

一生懸命に話をする桜子の様子は、難解な言葉を使用する弘康のものとは全く違っていた。頬を高揚させ、必死に言葉を紡いでいる。とても大人として扱える態度ではなかった。

「桜子は、覚えてる？ あの日のこと」

そう言った途端に部屋の空気が変化したのを雅彦は感じた。

恵里子の葬式には、桜子も出席したのだ。

幼い頃から病弱だった桜子は、『死』というものを、同年代の子供が認識しているそれよりも近くに感じていた。それにしたって今回の出来事は、まだ幼い桜子に少なくない衝撃を与えたこともまた、事実だった。

すっかり黙りこんでしまった桜子の様子を見て、雅彦は激しい後悔の念に襲われた。

(そんなつもりじゃなかったのに……。やっぱり覚えてないのか) あのクリスマススイブの日にした接吻を、桜子は忘れてしまったのだろうか？

雅彦は安堵と怒りと悲壮と、全ての入り交じった表情を浮かべた。隣に座っていた桜子は、俯いたままゆっくりと口を開く。

「恵里子さんは、殺されたの？」

桜子は不安そうに雅彦に尋ねた。顔には恐怖した表情が浮かぶ。

否定の言葉を渴望した声色。

「大丈夫だよ」

雅彦は否定も肯定もせず、桜子を抱き寄せた。

「にい、さん？」

桜子は不思議そうに雅彦を見上げ、戸惑いの声を出しながら瞬きをした。瞳にうつすらと溜まった涙が零れ落ちる。

潤んだ大きな瞳は、明らかに狼狽の色を含んでいた。また、否定も肯定もしない雅彦の態度を咎めているようにも見えた。

「大丈夫」

雅彦は、ただ「大丈夫」という言葉を繰り返すことしかできなかった。

そして右手で彼女の頬に流れた涙を拭った。続いてその手を桜子の顎に当てる。

「兄さん？」

先ほどよりはっきりとした、しかし相変わらず弱々しい声で桜子は声を発する。

「目を閉じて」

雅彦は恍惚とした目で桜子を見ていた。

桜子は狼狽の表情を浮かべたまま、その言葉の意味を十分に咀嚼した様子もなく、言われたとおりに瞳を閉じた。

(ずっと、このままなら良いのに)

しばらくの間夢なのか、それとも浮なのか、境界のはっきりしない時間が流れた。

(やっぱり、かわいい)

雅彦は躊躇うことなく桜子の口唇を塞いだ。柔らかい、夢の中に居るかのよう to 現実味のまるでない感覚。

昼下がりの太陽は、冬だというのにジリジリと橙色の光を容赦なくリビングに照り付ける。

どのくらい時間が経ったのか分からない。きっと、一分も経っていなかっただろう。

雅彦は桜子の声で我に返った。

「兄さん！ 苦しいよ」

雅彦の腕を強く掴んだまま、なかば叫ぶように言った。

「弘康兄さんには、秘密だよ」

雅彦は以前と同じように語りかけた。桜子が小さく頷くのを見て、彼女を共犯に出来たという事実に対する満足感で満たされた。

桜子は、雅彦の腕を掴んでいる手の力を少し弱めると、今度は小さく、咳くように言う。

「死にたくない」

その声は掠れて、聞こえるか聞こえないかどうかという程の音量だった。

大きな瞳にはまた涙を浮かべ、小さく咳き込んだ。

「死ぬのには、順番があるんだよ」

雅彦は安心させるように桜子の頭を撫でた。

桜子は、そんな雅彦を全幅の信頼を置いた目で見上げる。

（まるで犬だな）

雅彦は昔飼っていた柴犬を思い出し、苦笑した。

「まず、最初は兄貴。次が俺。桜子は最後だよ」

そう言っつて、また笑いかける。

「でも、恵里子さんは……」

桜子は執拗に恵里子の死を気にしている。

（知っているのか、いやそんなはずない）

雅彦は再び桜子の頭を撫でると、桜子の耳元で囁いた。

「恵里子は、呪われていたんだよ。あの蔵に」

「蔵？」

桜子はきょとんとした表情で雅彦を見上げる。

この町では有名な話だが、桜子は初めて聞く話のようだった。長い間病院にいたのだから無理もないだろう。

雅彦は再び右手で桜子の頬を流れる涙を拭った。

「そう、おばあちゃんの家には大きな蔵があるだろう」

恵里子は『儀式』の前、あの蔵から声を聞いたと言っていた。それが、雅彦達が恵里子を『生贄』に選んだ理由の一つでもあった。

親戚達が恵里子の死を騒ぎ立てないのもそうだった訳があるはずだ。

別の言い方をすれば、この町の住民は『呪い』を信じている。そして、その信仰がある限り、雅彦達の安全は守られるのだ。

「うん、」

桜子は静かに相槌を打ち、雅彦の言葉に聞き入っている。

「あそこには、お化けが出るんだよ」

お化けと言って良いのかどうか分からなかったが、それが一番適切な表現に思えた。

「お化け？ お化けって、幽霊のこと？」

「そう、お化けの声を聞くと呪われるんだよ。恵里子はその声を聞いてしまったんだ」

雅彦は優しく、諭すように語った。

しばらくの沈黙。桜子は眠そうに目を擦った。

「だから、桜子もあの蔵には近づいちゃ駄目だよ」

そう言いながら雅彦は桜子の手を握る。

(……熱い)

先ほど涙を拭ったときも感じたが、桜子の身体は僅かに熱を持っていた。

「うん、分かった」

小さく咳き込みながら了解の返事をした桜子の顔は、少し朱を帯びていた。

「……桜子？」

雅彦がそう言った瞬間、桜子は糸の切れた操り人形のように倒れこんだ。

(……重い)

人間は眠ると、突然重くなるという話を聞いたことがある。桜子の重みは、きつと体調の悪さによるものなのだろう。

雅彦は桜子の髪にそっと触れた。肩の下まで真っ直ぐに伸びた黒髪。

見ているだけでも美しいが、実際に触れてみると、温度、指通り、柔らかさが如実に感じられた。

しばらくの間、そうしていると雅彦の腕のなかに居た桜子がもぞもぞと動きだした。

「ごめんなさい、兄さん。わたし頭痛いから、部屋で休む。夕飯いらないから」

独り言のようにそう言い残すと、リビングを出て、桜子の自室がある二階へと続く階段へと歩いた。

雅彦も、桜子の素っ気ない態度には慣れたもので、貞一の手紙をポケットに入れると、桜子のあとを追うように階段を上った。

二階は、桜子の部屋の廊下を挟んだ隣の部屋が、雅彦の部屋だ。二階はその二部屋しかなく、弘康は応接間の隣の部屋で寝起きしている。

雅彦は自室へ入ると、自分のポケットに仕舞った手紙を机の一番奥に隠した。それからベランダに出ると、干してある布団を取り込んだ。空を見上げるとそれは、どんよりと曇った色をしていた。

(さっきまでは、あんなに天気が良かったのに……)

あれほど照りつけていた昼間の日差しが嘘のように、雅彦の目の前に広がるそれは、雨でも降りそうな雲行きだった。

「桜子？ 布団持って来たぞ、入るからな」

桜子は具合が悪くなると、いつも自室に籠る。以前は一人で居るのを怖がってリビングに布団を敷いて寝ていたのだが、弘康に風邪を移して以来、自室で眠るようになったのだ。

「どうぞぞー」

桜子の返事を確認してから襖を開く。パジャマ姿の桜子が勉強机に座っているのが見えた。

「宿題が終わらないの。七日までなのに……」

桜子は、学校の宿題をしているようだった。プリントが二枚と、教科書一ページ。雅彦からしたらたいした量でも、難しいわけでもないが、桜子にとっては大変なものなのだろう。病気で低学年のときはろくに学校に通っていなかった。

「いざとなったら俺がやつとくよ。いいから、ほら、布団敷いたから」

雅彦は部屋の中央に布団を敷き、ポンポンとそれを叩きながら答

えた。部屋の時計を確認すると、もう午後の四時をまわっていた。

(雨、降る前に買い物行かないと……)

年始は色々と忙しく、買い物に行っていなかった。今朝冷蔵庫を見たら、ほとんど食材がなくなっていたことを思い出した。

「……でも」

桜子は宿題を手伝うという雅彦の申し出を後ろめたく思ったのか、再び視線を机の上に戻した。

「大丈夫だって」

そう言っつて、雅彦はなかば強引に桜子を布団へと寝かしつけた。

勉強机のスタンドの灯りを消す。

「薬。買ってくるから、えーと、六時までには帰るよ」

大きなスーパーマーケットは町に一つしかない。車の免許を持っていれば、大きな国道を通り十分ほどで辿り着くが、バイクの免許しか持っていない雅彦は買い物のために往復で一時間は費やしてしまう。

「兄さん」

桜子は目を半分だけ開けて、雅彦に手を伸ばした。少し寂しそうな声。

「……気をつけてね」

桜子を一人で家に残すのは不安だった。一人で寂しい思いをしているのは病院に居ても家に居ても同じだと思っっているのかも知れない。

(可哀想、つて思っっちゃいけないんだろうな)

「分かってる」

雅彦は部屋の電気を消し、バイクの鍵を探した。

階段を下りた雅彦はリビングを横切り、玄関の隣にある神棚に近寄った。鍵や通帳などの貴重品が置いてある場所だ。しかし、さすがに土地の権利書などは置いていない。

「あった」

雅彦はバイクの鍵と財布を手に取ると、玄関を出た。ヘルメット

を被り、慣れた手つきでそれを発進させる。

(寒い)

冬の風は、バイクに乗っていると余計に冷たく感じる。ダウンジャケットを着ていても、身が斬られるように痛む。

スーパーマーケットへ続く大きな国道は、雅彦の乗る原付きのバイクでは通ることができない。だから大きく道を迂回する必要があった。

(来年になれば免許が取れる)

しばらくバイクを走らせながら雅彦は車の免許が取れた後の生活を思案していた。

(買い物も楽に出きるし、学校へも行けるな。でも保険替えないと駄目か……高くつくな)

そんなことを考えているうちに目的地のスーパーマーケットへ辿り着いた。

バイクを止め、室内へと足を進める。

(……寒い)

スーパーマーケットのなかは冬だというのに冷房がガンガンにかかっていた。

食品を扱う場なので当たり前のことだが、外とあまり気温が変わらないというのは考えものだ。

(今日は……鍋にしようか？ 洗い物少ないし)

寒さで小刻みに震える身体を押さえながら、雅彦は今夜の夕飯と、今後の食材を選んだ。

(アイスは苺味だよな)

そして、桜子のためのアイスクリームを手にとった。風邪をひいたらアイスクリームを食べるというのは、どこの地域でも存在する習わしなのではないだろうか？

『苺アイス』と書かれた小さな商品を買った物かごに入れた雅彦は小さくクシャミをした。アイスクリーム売り場は魚売り場の次に寒い場所だった。

(早く帰ろう)

雅彦は重たい買い物かごを持ち替えると、他の売り場へと歩き始めた。

「あのう、ちよつと君……」

肩を叩かれた。

振り返ると、

「黒木、雅彦君？」

「……はあ。どちら様ですか？」

知らない男が立っていた。人当たりの良さそうな顔に、四角い眼鏡。ボサボサの髪は少し脂ぎっていた。

サラリーマンに見えなくもないが、スーツではなくラフな服装をしていた。

(変な人だ)

男は雅彦のそんな考えを見透かすように答えた。

「俺は、江崎。東京で雑誌書いてる」

「東京の方、ですか」

江崎の差し出した名刺には、確かに東京の住所が書かれていた。

「それで、俺に何か？」

雅彦は渡された名刺と、江崎の顔を交互に眺めた。

(まさか、バレた?)

東京の記者がこんな田舎に来るということは、それなりの情報を既に掴んでいると予想される。

(どこまで、知ってるんだ?)

雅彦はヒヤヒヤしながら江崎の顔を伺った。

「いや、それがね。道に迷っちゃって。この辺りに小さな村があると思うんだけど、知ってるかな? 黒木君?」

江崎は穏やかなに、しかしどこか問い詰めるような口調で話した。記者だというのに、取材相手に媚びるような素振りもない。

営業をしている弘康のそれとは全く別の態度だった。

「知りません。それに俺は『黒木』なんて名前じゃありません」

雅彦はシラを切ることにした。

こんな胡散臭い記者に関わっている暇などない。一刻も早くこんな寒いばかりの場所を去り、桜子にアイスクリームを食べさせてやらないといけないからだ。夕飯の支度もしておかないと、弘康の機嫌が悪くなる。

「そう。じゃあ何て名前なのかな？ 教えてくれると嬉しいんだけど」

江崎は相変わらず穏やかさのなかにも、どこか恐ろしい意志を孕んだ口調で問いかけた。

少しの間でも答えを渋ることを許さない、とでも言っているようだった。

(参ったな)

頭をフル回転させてそれらしい名前を導きだす

「斎藤貞一、といいます」

ついさつき読んだ手紙に書いてあった名前。咄嗟に思い浮かんだのはそれだけだった。

「斎藤君、ていうと新潟にいる親戚の？ たしか名前は貞一、だったと思っただけ」

江崎の返事を聞いて、雅彦は心臓を掴まれたような気分になった。一瞬たりとも気が休まらない。尻尾を見せたらすぐにバレる。

(マズいな、かなり調べてる。一体どこまで知ってるんだ？ もしかして……)

雅彦は生唾をぐくりと飲み込んだ。あれほどまでに寒いと感じていたのに額にはうつすらと脂汗が滲んでいた。

もしかして、全部バレてる？

今の自分の嘘も、恵里子の殺人も、村の風習も、江崎は全て知った上で自分に声を掛けたのではないか？ 雅彦はそんな想いに捕われてしまった。

(……暑いな)

頭の働きが鈍くなり、視界が一瞬ぼやけた気がした。どうして自

分は手袋をはめているのだろうか？ どうしてこんなに厚着をしているのだろうか？

そういえば今、何月だったけ？

「斎藤君？ 貞一君？」

江崎に肩を揺さぶられて、雅彦は我に返った。同時に、自分の狼狽ぶりを江崎に露呈したことを悔やんだ。

（でも、偽名を使ったことは気付いてないな）

雅彦がすぐに回答したという理由もあるだろうが、その点に関しては江崎も疑う素振りを見せなかった。

（そうか、貞一君は新潟だから、まだ会ってないんだ）

雅彦は冷静に物が考えられるようになり、できるだけしっかりとした口調で返事をした。

「いえ、大丈夫です。でも俺、この辺のこと良く分からなくて……すみません」

ここは一つ、ハツタリをかますしかない。すぐにバレる嘘かもしれないが、とりあえず今はなんとかなりそうだな。

「そうか、神崎君の家にも寄ったんだけど、警察を呼ばれそうになつてね。知ってる？ あそこのお父さん、警察官でさ」

江崎は今までとは打って変わって親しげに話し出した。やはり彼は『黒木』家の誰かを疑っているのだろうか？

（それとも、これは演技？）

雅彦は江崎のころころと変わる印象を不振に思いながらも、自分を貞一であるという演技を続けた。

（周一君は何も話していないみたいだな。まあ、それもそうか）

実行犯である周一が、疑われていないというのはおかしな話だ。

しかし、そもそもこの記者は、小さな田舎町に残る風習を調べに来ただけなのかもしれない。

「ええ、聞いたことはありませんよ。一応親戚ですから」

貞一を名乗った以上、周一とも面識がないとおかしい。それに、斎藤の家のほうが黒木家より神崎家と近い関係にある。貞一は雅彦

たちよりも、周一とのほうが親しい間柄のはずだ。

「そっか、でも君は一つ嘘を吐いているね」

射るような視線で、江崎は雅彦を見つめる。嘘を一つ暴き、満足した様子だった。

「さつき君は俺が道を訊いたとき、『知らない』と答えた。貞一君なら知ってるよね？」

江崎は勝ち誇った目をしていて。片方の口角を吊り上げて、歪んだ笑みを浮かべる。

(ヤバい、これは非常にマズい状況だ)

周一の親戚を語った以上、言い訳をすることは許されていなかった。

どうにか切り抜けよう

この際、辻褄が合えばひどい嘘でもいい。雅彦は、ひとまずこの場を離れたかった。

「すみません。知らない人だったのでつい。すぐその大きな国道を通れば着きますよ。十分くらいかな？」

雅彦は人当たりの良い顔を張り付けて、そう答えた。

(頼む。騙されてくれ)

こんなことになるなら初めから嘘なんて吐かなければ良かった。

あとで必ず暴かれるのに。

「そうかあ、その国道ねえ。分かったよ、ありがとう斎藤君」

江崎は雅彦の肩を叩いて礼を述べた。車の鍵であるうそれを人差し指で器用に回転させる。

「それじゃ、俺急いでるんで」

江崎の返事を聞かずに、雅彦はレジへと歩き出した。

また何か話を振られても、返答に困るだけだ。早く立ち去るのが賢明なのだ。

(今日は、魚介の鍋にしよう)

雅彦は、買い物かごのなかのホタテが美味しそうに煮えている想像を巡らせた。

四章 猫をも殺す好奇心(2)

冬休みは一月七日に幕を閉じた。

長い休みのあとはどうも気分が優れない。桜子の風邪もまだ完全には治らず、会社が休みの弘康が面倒をみている。

「はあ」

雅彦は憂鬱な気分のため息を吐いた。昼休みの教室は冬だということに暑苦しい。

類杖をついて、目を閉じて、今日の予定を考える。

(帰りにスーパー寄らないとな。ハンバーグ食べたい)

この時間に夕飯の心配をするのが雅彦の日課となっていた。

(でも今日は兄さんが作るのか。桜子と料理するのか？ 羨ましい) 廊下側の一番前が雅彦の席だった。机の上に勝手にものを置かれるのも、もう慣れた。

便利な位置にある机なので、廊下で会話した生徒が教科書等を置きっぱなしにすることが頻出するのだ。幸い、今は誰にも勝手に机を使用されることなく、雅彦はゆつくりとため息をつくことができる。

「黒木、おい黒木！」

名前を呼ばれた気がしたが、雅彦は目を閉じたまま動かない。

「くーろーきーくーん。まーさーひーこ兄さーん」

今度は耳元で声が聞こえた。

雅彦は仕方なしに目を開け、声のしたほうを見る。

「先輩。なんですか？ 先輩に兄さん呼びわりされたくないんですけど」

ため息が吐きたい。でもそれは流石に失礼だし……。

雅彦はゆつくりと息を吐き出すと、瞬きを二三度繰り返した。

まだ昼みだというのに、外の景色は薄暗かった。重たそうな雲がどっしりと動かない。家に帰るまでは雨が降らないことを祈ろう。

「何だはないだろ何だは。せつかく面白い話持ってきたのに」

秋原は人の良さそうな笑顔を浮かべ、雅彦に語りかけた。三年生はこの季節忙しいはずなのに、どうしてここへ来たのだろう？

（こういうのを『良い人』とかいうのかも）

雅彦は、秋原を尊敬の眼差しで見つめた。それには成績が悪いのに、こんなところで油を売っている秋原の凶太さ、慢心さ、計画性のなさ、に対する呆れも入っていた。

「面白い話？」

雅彦は驚いて言葉を反芻させた。眠たそうだった眼を大きく見開く。

秋原が三年生の教室から、わざわざ別館にある二年生の教室まで来たのも意味があるような気がした。

「そうそう。この前の……」

そのとき、授業開始五分前を知らせるチャイムが鳴った。クラスメイトたちは相変わらず雑談を続けている。

「あれ、予鈴だ。もうこんな時間かあ」

秋原は教室の壁に掛けられた時計に目をやった。教室を出るときには時間を確認しなかったらしい。

「次体育なんだよな。じゃあ、放課後また来るわ」

そう言葉を続けると、「じゃ」と右手を挙げ、教室を出ていってしまった。

（放課後来るのか……）

あまり暗くなる前に帰ろうと考えていた雅彦は大きなため息を吐いた。そして、次の授業まであまり時間がないというのに、教室を出る。

廊下は教室移動をする生徒でごった返していたが、雅彦は上手にすり抜けて、購買部を目指した。

二年生の教室から購買部まではそれほど距離がない。

一分も経たないうちに、雅彦は目的地まで辿り着くことができた。
(流石に焼きそばパンは売りきれてるな)

一番人気のコロッケパンは去ることながら、焼きそばパンまでも
が売り切れていた。もっとも、この時間にパンが余っていることな
どあり得ないのだが。

(……あつたあつた)

雅彦は目的の品を見つけ、それを手にとった。百五十円の大きな
コーラ。

ポケットから財布を取りだし、レジへ向かう。

「あのう、温めてください」

レジのおばさんは蓋を外し、温めてくれた。

きつと素晴らしく不味い液体が完成したことだろう。

「秋原先輩、コーラです」

雅彦は、秋原にコンビニで購入したコーラを渡した。

「おう、ありがとう。ちゃんと暖めたやつだよな」

「ええ、もちろん」

雅彦は大きな欠伸をかみ殺した。

開け放たれた窓からは、冷たい風が吹き抜ける。

(雨降らなくて良かったな)

雅彦は安心し、秋原に話しかけた。

「それで、面白い話ってなんですか？」

秋原が放課後に、こうして自分をわざわざ訪ねて来たのにも、ち
やんとした理由があるはずだ。

「そうそう、この間お前が言ってたアレ。調べたら色々分かった
んだよ」

雅彦は思わず、小さく息を呑んだ。

クリスマススイブに起きた出来事が、まるで昨日のことのように思
い出された。

小さな頃から面識のあった恵里子。彼女を殺したのは間違いなく自分なのだ。

共犯者がいるにしても、『殺人』という言葉が、ずしりと頭にのしかかる。

「そう、ですか。それで、何が分かりました？」

冬はすぐに暗くなる。さっきまで夕焼けが綺麗だった窓も、ただひたすらに暗い闇と冷たい風しか通さない。

「ああ、それがな。前にも言ったように『儀式』はずっと前から続いていったんだよ。

もともとは『間引き』の意味を持っていて、体の弱い奴や、下の兄弟を殺していく風習だったらしいんだ。

しかし、宗教の関係か何なのかは定かじゃないんだが、二百年くらい前から数十年に一度『生贄』を捧げる『儀式』に変化したらしい。

最初のうちは分家の子供から選ばれていたんだが、ある年、本家に明らかにヤバい奴が産まれたんだ。

『狐憑き』っていうのか？ 奇声を発したり、突然沫噴いてぶっ倒れたり、おかしな言動が目につく奴だったらしい。

そいつは十歳になるまで、ずっと蔵に閉じ込められていた。

時折蔵から聞こえる奇声も、暗黙の了解のように町では無視された。

……初めての本家からの『生贄』だ。

まあ、『本家から「生贄」が出た』って一文献はそれしか載ってなかったけどな。問題はここからだ。

それからというもの、夜中にその蔵に近づくと、奇声が聞こえるらしい。

声を聞いた奴は次の生贄になる」

そこまで話すと、秋原は大きく息を吐いた。

そして、照れたような笑みを浮かべると、また言葉を続ける。

「でも、肝心の『生贄』を選ぶ方法が分からないんだよな。まあ、

暇潰しにはなつただろ」

笑顔を浮かべる秋原とは対照的に、雅彦は暗く沈んだ表情をしていた。思っていることがすぐ顔に出てしまうというのは、損な性分だ。

「黒木？ どうした？ 顔色悪いぞ」

秋原は心配した様子で雅彦の顔を覗きこむ。

（白々しい奴）

雅彦はそう思うと、顔をしかめた。眉間には深い皺が寄る。先日話した『東京の記者』という存在も心配の種だった。

もし、秋原が江原にこの話をすると厄介なことになる。

恵里子が死んだことは、秋原も知っているはずだ。そして彼女が蔵からの声を聞いていたことも。記者に伝わればどんな風に書き立てられるか分かったものではない。

雅彦は秋原に探りを入れることにした。

「先輩は、東京から記者が来ているという話しをご存知ですか？」
雅彦が尋ねると、秋原は空いている窓に目をやった。続いて教室に掛けてある時計の方を向く。

「寒いな、もう六時か……」

そう言いながら、手に持った暖かいコーラを一口。

「……！」

口に含んだそのとき、秋原は声にならない叫びを発した。

雅彦の方を大きく見開いた瞳で見つめ、口をパクパクと動かしている。

（やった）

その様子をみる雅彦は、安堵の感情に支配された。人を殺して、安心するなんて、彼は自分でも奇妙に思う感情を抱いていた。

それでも雅彦の顔には笑みが広がり、遂にはカラカラと乾いた笑い声を上げた。

（鼠捕りの砒素って結構効き目あるなあ）

勝ち誇ったような笑みをそのままに、雅彦は教室をあとにした。

(記者も殺しておかないと……)
暗く、非常灯の光だけが煌々と点いた廊下に、雅彦の足音だけが響いた。

四章 猫をも殺す好奇心(2) (後書き)

最後までお読み下さり、ありがとうございました。
次は番外編です。

番外章 ' W ??? M ? ? C

夏は暑いですね。当たり前ですけど。今日は特別に暑いと感じました。

でも、僕はこういう季節好きですよ。雅彦さんはお嫌いなんです。たっけ？

それにしても大変でしたね。七回忌っただけでこれだけ親戚が集まるなんて、思いませんでしたよ。

神崎さん家は来てませんでしたけど、どうしたんでしょう？ 冬に来たときも僕とは話そうとしなかったし、嫌われているんでしょうね。きっと。

……もうこんな時間だ。おじいさんの家に戻らないと……。帰る前にゲームしたいんですけど、雅彦さんもしませんか？

え？ ファミコン？ 違いますよ。トランプです。ファミコンはマイクを使って遊ぶのが正しいファミコンであって……。それにコントローラーの持ち方だって床に置いて使うのが一番ですよ。そうですね。

話が逸れました。トランプです、トランプ。七並べ、知っていますよね。ルールは逆七です。十三が出たら一から、一が出たら十三から出していくんです。

二人じゃつまらないから、桜子さんも誘いましょう。弘康さんは忙しいですよし……。

はい？ 桜子さんはもう寝た？
困りましたね、まだ随分早い時間なのに……。でも、小学生なんてそんなものでしょうか。

じゃあ、ごうじましよう。これから僕が一つ話をします。

……面白くはないですよ、茶化さないで下さい。面白い話も出来ますけど、今はハードルが上がっているので、またの機会に。

話が終わるまでに桜子さんがリビングに来たら、トランプをしま

しよう。来なかったら……僕はおとなしくおじいさんの家に戻ります。

もし、トランプをすることになったら何かを賭けませんか？ ただ遊ぶだけじゃあつまらないじゃありませんか？

だから違法賭博とかじゃなくてですね……まあ良いです。とりあえず話を聞いて下さい。

いいですね。じゃあ話します。

あれは、僕がまだ桜子さんより幼かったときですか。

どんな理由かはもう忘れてしまいましたが、僕は神社に居たんです。冬に行ったところですよ。覚えてますよね。

一人の男の子が居て、一緒に遊んでいました。

彼は自分を『ユキちゃん』と呼び、僕も何の疑問も抱かずそう呼んでいました。おかしいですよね。『ユキちゃん』なんて女の子みたいな名前……。本名は行人か俊行、幸雄、由紀つてところですか？ 由紀は女の子っぽいですかね。

彼は宇宙人のことも未来人のことも知っていましたね。僕ととても話が合いました。彼は神様という存在は黒い髪の毛のキラキラしたおじさんだと言っていましたけど、それは嘘です。神様は宇宙にいる、宇宙人ですから地球人であっちゃんいけないんですよ。僕は彗星人だと思ってるんですが、違う意見の人も多いようで、本当のところは分かりません。ただ、地球人でないことだけは確かです。だってそうでなければ、未来人の存在意義がありませんからね。分かります？ まあいいです。ユキちゃんですよ。彼について、そのうちおかしなことが分かったんです。

ユキちゃんは僕にしか見えていないんですよ。

神社の神主さんも、通りすがりのおじさんも、ユキちゃん存在を認識していません。

僕も、今となつてはあまり覚えていないんですけど……あれは、

今日みたいな暑い日でした。蝉の鳴く声が煩くて、雨が降っているみたいに聞こえました。神社の裏の山の木には葉っぱが沢山生い茂り、もともと日の当たらない神社ですが、いつそう薄暗く感じました。

ユキちゃんは着物を着ていて　女物の着物なんですよ。おかしいなあ、って思ったんですけど、そのときはあまり気にならなかったんです。

彼は、懐から花札を取り出したんですよ。僕、花札ってあんまり得意じゃなくて……こいこいだっただんですけど、雅彦さん得意ですか？　あれは運の要素は確かに強いんですけど、技術も必要じゃないですか。

……そうですね。負けました。僕の方が早くこいこいになったはずだったのに、あれはおかしいです。イカサマしてましたよ。彼は着物はイカサマし易いですからね。まあ、当時の僕はそんなこと知りもしなかった訳なんです。

「僕が勝ったから『数字』を頂戴」

いきなりそう言われたんです。僕は断れば良かったんですが、断れるような雰囲気ではありませんでした。目の前には片手を差し出したユキちゃん。女物の着物を着ています。場所は、人気の少ない神社。断れないですよ。

そんな経緯です。左の視力がなくなったのは……。

『数字』を取られたときに、彼の名前が分かりました。どうしてって、言われても分かりません。僕が『数字』の存在を認識したときのような感覚です。最初からある知識を思い出したような感覚に近いと思います。

彼の本当の名前は『春瀬雪乃』です。

季節を表す語句を名前に入れるのは良くないとされているのは知ってますよね。ましてや『雪』なんて儂いものはなおさらです。

でも彼の名前は雪乃。きっとそれが原因なんです。彼が『見えな
い』人になったのは……。まあ、他にも理由はあるでしょうけど。
僕も、今では彼の姿を見ることが出来ません。僕も数字は欲しい
ですけど、彼の呪いのせいで片方の視力を奪われました。
数字を減らすために行う為の呪い。僕は、『蜘蛛ノ呪イ』と読
んでいます。ネーミングはテキストウですけど、わりと格好良くない
ですか？

ああ、桜子さん。起きたんですか？ 何？ 最初から寝ていない
？ だそうですよ。雅彦さん。そうですね、桜さんだつて
いつまでも子供じゃないんですから。

良いですね、やっぱり七回忌だけある。今日はツキがありますよ。
いいですね、七回忌の日に七並べ、ルールは逆七。

そうそう、何か賭けるんですしたっけ？ じゃあ、僕が勝ったら、
雅彦さんの視力を下さい。

……出来ますって数字を移動させるだけなんですから、簡単です。
僕が負けたら……：：：そうですね、じゃあ僕の『存在』をあげます。
数字で換算すると、十二は有りますよ。良いでしょう？ だから出
来ますって。

……桜子さんはどうします？ いいですよ、何でも。お母さんの
形見はいけませんよ。大事なものですから。いや、なんでも良いで
すけど……。はあ、分かりました。じゃあそれで良いですよ。

そうそう、雅彦さん知ってます？ この辺りの土地は女の子が育
たないらしいんですよ。恵里子さんも亡くなってしまったし、雅彦
さんの学校でも女子は少ないんじゃないやありません？ ……心配は尽き
ませんねえ。雅彦さん？

はい！ 配りましたよ。

では、始めましょう。真剣勝負待った無し、パスは一人三回まで
です。良いですか？

じゃあ、ダイヤの七の桜子さんからどうぞ　良いですね、トリア
ンプなんて久しぶりです。手加減無しで頑張ります。
だって、これは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4691q/>

猫をも殺す好奇心

2011年8月29日03時39分発行